様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：８２６１１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３２０８

研究課題名（和文）強迫性障害患者とその家族に対する統合的介入モデルの構築

研究課題名（英文）Development of an integrated clinical model to OCD Patients and their families

研究代表者
堀越　勝（Horikoshi, Masaru）

独立行政法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・部長

研究者番号：６０３４４８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：強迫性障害（以下OCD)患者13名に対して、週1回12-16週間の曝露反応妨害法を中心とした認知行動療法を実施したところ、OCD症状とうつ症状が有意に改善した。またOCD患者の家族用マニュアルを用いた家族介入を実施したほか、専門職向けに、OCDに対する治療法の研修や国際セミナーを実施し、OCDの治療や研究に関する最新の情報を提供した。OCD患者家族の巻き込まれ尺度と家族機能尺度日本語版を、原著者の許可を得て作成している。今後はこれらの尺度を用いて患者家族の実態調査を行い、より有効な家族支援について検討を重ね、OCD患者に対する包括的な支援を提供することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Thirteen adult patients with OCD according to DSM-IV criteria received Exposure Response Prevention (ERP) program for 12-16 weeks. Obsessive-Compulsive Symptoms and depressive symptoms were significantly improved by performing the ERP program. In addition, a manual based family intervention was provided to the families of the OCD patients. For professionals, OCD workshop and seminar conducted by international experts were provided in order to update information regarding OCD treatment and research. We are in the process of standardizing two scales; Family Accommodation Scale for OCD, and OCD Family Function scale. Conducting a survey of the current family condition with these scales and we will design more effective family program. In this way, comprehensive support system for OCD patient would be expected.

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：挑戦的萌芽研究

キーワード：強迫性障害　認知行動療法　家族

１．研究開始当初の背景

（1）強迫性障害（Obsessive Compulsive Disorder, 以下 OCD）は、成人の約 2.5%に発症すると言われる難治性の精神疾患である。OCD は 0.5%から 1%の児童にも見られ、成長とともに消滅する場合もあるが、ほとんどの場合は家族メンバーを巻き込むと報告されている。こうした症状に巻き込まれることで、家族は仕事時間の短縮や社会活動の制限を強いられるほか家族機能が障害され、家族成員の QOL は低下すると言われている。さらに、巻き込まれは患者に対する治療効果も低下させ、OCD 症状の重症化にもつながっていく。OCD 患者が症状に気付いてから治療を受けるまでの平均期間は 7 年であり、OCD に苦しみながらも何十年間も本人が、または家族全体で障害を隠し続けるケースも珍しくない。OCD 患者の年齢層が若い場合はもちろんのこと、症状が重篤であればあるほど、家族を巻き込んだ家族病としての性質が出現する障害だと言える。

（2）OCD に対する現時点での介入方法は薬物療法が主流であり、精神分析的な介入も行われているが、効果についての実証的検証に至っていない。近年、欧米では、認知行動療法、特に曝露反応妨害法（Exposure and Response Prevention, 以下 ERP）による介入が奏功しており、薬物療法との併用、または単独で用いられるケースが多くなってきている。日本においては、主に薬物療法が行われ、家族への介入を含んだ統合的な OCD への介入はほとんど行われていない。家族への介入は必要不可欠であるにもかかわらず、家族会などのソーシャルサポートに留まっており、家族を巻き込んだ OCD への治療的な介入までには至っていない。

２．研究の目的

本研究の目的は、(1) OCD に対する介入法として開発され、治療効果の高いとされる ERP を OCD の成人患者を対象に実施し、その有効性について心理尺度を用いて明らかにすること、(2)OCD 患者を抱える家族に対する実態調査と介入を実施することにより、本人だけでなく、OCD 家族への介入も含めた統合的で有効な OCD に対する新しい治療モデルを構築すること、(3)本人や家族、専門職を対象に、OCD の治療法や最新の専門情報を提供していくことである。

３．研究の方法

(1)OCD に対する ERP の有効性を検討する

国立精神・神経医療研究センター病院精神科を外来受診する OCD 患者のうち、強迫性障害の診断を満たし、20 歳以上 65 歳以下で、同意を得られた患者を対象にした。研究責任者が作成したマニュアルに基づき、ERP を主とした認知行動療法(以下 CBT)を 16 週間の実施期間に原則として 12-16 回（1 回 50 分）実施した。12-16 回のセッションのうち、1-2 回目は患者の OCD 症状に沿って OCD や ERP に対する心理教育が行われ、3-11 回目、または 3-15 回目には ERP が実施された。最終回では再発予防について話し合われた。セッションの実施者は、OCD に対する CBT のトレーニングを修了し、これまでに CBT を実施してきた医師と臨床心理士であった。ERP 実施時には、臨床心理士が CBT 実施者の補助（コーチ）として同席した。実施期間中、CBT 実施者は研究責任者による指導を受け、治療の等質性を確保した。CBT 実施前と CBT 終了時には、OCD 症状の重症度（Y-BOCS; Yale-Brown Obsessive Compulsive Scale)と、うつ症状の重症度(QIDS; Quick Inventory of Depressive Symptomatology、及び BDI: Beck Depression Inventory)が評価された。さらに、症状評価結果を踏まえて、家族に対する心理教育の必要性やその内容、心理教育を実施するタイミングなどが検討された。

(2)OCD 患者を抱える家族に対する実態調査と家族介入を検討する

①OCD 患者家族に対する実態調査を評価するため、現在海外で最も利用されている家族の巻き込まれ尺度(FAS: Family Accommodation Scale)と、家族機能尺度(OFF: OCD Family Functioning Scale)患者用・患者家族用の日本語版をそれぞれ作成した。この作成については、①各尺度の原著者より日本語版作成の同意を得る、②医師、臨床心理士による順翻訳、③各尺度の原版を知らない臨床心理士による逆翻訳、④各原著者による確認、⑤原著者からの指摘を基に医師と臨床心理士が修正、⑥各原著者による最終確認であった。

②家族の巻き込まれに関する実際調査（パイロットスタディ）として、国立精神・神経医療研究センター病院精神科を外来受診し、目的（1）の研究に参加している患者家族 7 名に対して、CBT 終了後に、CBT プログラム実施前と、終了後の過去 1 週間について、強迫性障害に対する巻き込まれに関する質問紙調査を実施した。

(3)本人や家族、専門職を対象とした OCD の治療法や最新の専門情報を提供する

OCD の国際的研究機関である国際 OCD 財団(International OCD Foundation, 以下 OCD)に対して、資料提供や治療法などに関する最新情報の提供を依頼した。

４．研究成果

(1)OCD に対する ERP の有効性を検討する

同意を得られた 16 名に対して ERP を実施し、このうち 12-16 回のセッションを終了した 13 名に対して ERP の有効性を検討した。13 名中 12 名は、患者の家族が数回のセッション、または全セッションに同席した。同席家族の属性は、父親、母親、または両親が 8 名、配偶

者が 4 名であった。研究対象者の属性を表 1 に示す。

表 1　対象者背景

		平均(SD)
年齢		31.53 (11.37)
発症年齢		21(9.09)
罹患期間		10.19 (10.35)
		N (%)
性別	男性	5 (38.5%)
	女性	8 (61.5%)
婚姻状態	既婚	7 (53.8%)
	未婚	6 (46.2%)

このうち、これまでの終了ケース 13 ケース全てにおいて、CBT 実施前後で OCD 症状を評価する Y-BOCS が有意に改善し(F[2,12]=18.655, P<0.001)、うつ症状を評価する BDI-II (F [2, 12] = 5.365, P < 0.05,) ,QIDS(F[2,12] = 6.446, P<0.01)も有意に改善した。CBT 実施前後の症状変化を表 2 に示す。

	CBT 実施前	CBT 実施後
Y-BOCS total	24.62 (4.63)	16.08 (4.59)***
強迫観念	12.85 (2.34)	7.77 (2.59)***
強迫行為	11.77 (2.49)	8.31 (2.18)***
BDI-Ⅱ	18.85 (11.5)	13.23 (11.29)*
QIDS	10.15 (4.81)	6.46 (4.54)*

***P < 0.001. **P < 0.01. *P < 0.05.

CBT 実施前後の症状評価結果、家族の巻き込まれに関する書籍や国際 OCD 財団の HP を参考に、家族心理教育用の資料（家族用マニュアル）を作成した。資料は、家族の巻き込まれと OCD 症状との関係や、OCD 症状の緩和に有効な家族の関わり方の説明などで構成された。この家族マニュアルを用いて、患者とその家族は、実際に家族が巻き込まれている状況を特定したうえで、具体的な家族対応について CBT 実施者同席のもと検討した。

（2）OCD 患者を抱える家族に対する実態調査と家族介入を検討する

①OCD 患者家族を対象にした、OCD に対する家族の巻き込まれ尺度(FAS-SR)日本語版と、患者と患者家族を対象にした、OCD に対する家族機能尺度(OFF)患者用、患者家族用日本語版を作成した。FAS 日本語版、OFF 患者用日本語版、OFF 患者家族用日本語版に関する妥当性と有効性の検討を現在進めている。

②家族の巻き込まれに関する実態調査（パイロットスタディ）を、国立精神・神経医療研究センター病院精神科を外来受診し、目的（1）の研究に参加した患者の家族 7 名に対して、巻き込まれに関する質問紙調査を実施した。このうち 6 家族から回答が得られたが、記入漏れのあった 2 家族は除外したため、4 家族を評価対象とした。家族の属性を表 3 に示す。

表 3　患者家族の属性

	性別	年齢	患者との関係
Case1	女性	61	母親
Case2	女性	73	母親
Case3	女性	54	母親
Case4	男性	42	夫

全てのケースにおいて、CBT 実施前と終了後の過去 1 週間では、家族が患者の OCD 症状に巻き込まれる頻度と強度が低下した（図 1）。特に、質問項目のうち「私は親族に対して、彼/彼女の OCD に関する心配の根拠は何もないと再保証した」、「私は親族の OCD のために自宅が普通でない状況にあるのに耐えた」の 2 項目が、CBT 実施前では全ての家族が「毎日ある」と回答した。

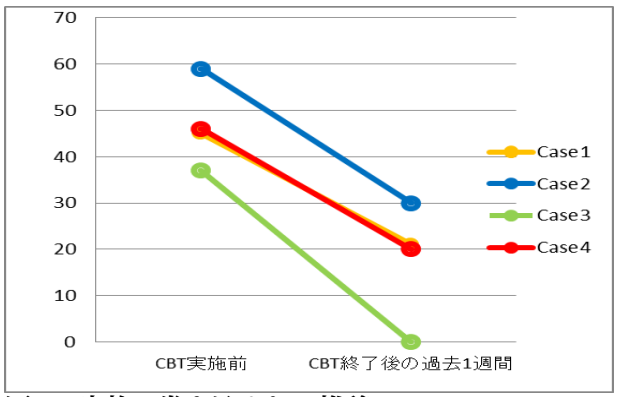

図 1　家族の巻き込まれの推移

OCD の患者家族の巻き込まれは、海外では多く報告されている。このパイロットスタディの結果から、本邦においても患者家族が患者の強迫行為や強迫観念に巻き込まれていることが示唆された。今後は OCD に対する家族の巻き込まれ尺度(FAS-SR)の標準化を進め、FAS-SR を用いて、巻き込まれに関する患者家族の実態調査を実施する。その結果を踏まえて、家族支援プログラムを患者家族に提供することで、OCD 患者への包括的な支援に貢献することが期待される。

(3)本人や家族、専門職を対象とした OCD の治療法や最新の専門情報を提供する

①HP の立ち上げ

OCD に対するウェブを立ち上げた

(https://sites.google.com/site/ocdjapan/home)。患者やその家族向けには、OCD の症状や治療、患者への介入ポイント、推薦資料などの情報を掲載した。また治療者向けには、国際 OCD 財団が発行するニュースレターを翻訳し、専門情報を掲載した。

②専門職向け研修
専門職を対象とした OCD に対する認知行動療法研修として全 6 回のプログラムを二年連続で実施した。プログラムの内容を表 3 に示す。

表 3　専門職対象研修プログラム

研修内容
① 強迫性障害について
② 強迫的溜め込み･抜毛癖
③ 曝露反応妨害法
④ 家族の巻き込まれ･家族への介入
⑤ 薬物療法･入院治療

この他、同内容で一日ワークショップを開催した。

③専門職向け国際セミナー
国際 OCD 財団から海外講師 4 名を招聘し、東京と京都に於いて、国際セミナーを開催した。セミナーでは、OCD の治療や研究に関する最新の情報を参加者に提供した。

④国際 OCD 財団との関係構築、及び OCD Japan の立ち上げ
国際 OCD 財団年次大会に参加し、関係者からの知識提供やコンサルテーションを受け、国際 OCD 財団との協力関係を構築した。さらに、患者、患者家族、及び専門職に向けた情報提供、患者家族も含めた包括的な支援体制の構築を目指して OCD Japan を立ち上げた。OCD Japan は、国際 OCD 財団のグローバルパートナーとして認定され、今後は同財団と連携によるグローバルな展開が期待される。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）
① Yuki Kobayashi, Ayako Kanie, Issei Shinmei, Noriko Nakayama, Yuriko Takagishi, Masaru Horikoshi: Family Accommodation in Obsessive Compulsive Disorder: A Pilot Study in Japan, International OCD Foundation 20th Annual OCD Conference, Hyatt Regency Atlanta, 2013.7.19-21
② Issei Shinmei, Ayako Kanie, Yuki Kobayashi, Noriko Nakayama, Yuriko Takagishi, Masaru Horikoshi: Manual Based ERP for Japanese Obsessive Compulsive Disorder: A Pilot Study, International OCD Foundation 20th Annual Conference, Hyatt Regency Atlanta, 2013.7.19-21

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ
OCD Japan ホームページ
https://sites.google.com/site/ocdjapan/home

研修
① 堀越勝、蟹江絢子、小林由季、新明一星、中山孝子：強迫性障害の認知行動療法（全 5 回）、国立精神・神経医療研究センター高田馬場研修センター、2012.11.29-2013.1.10
② 堀越勝、蟹江絢子、小林由季、新明一星、中山孝子：強迫性障害の認知行動療法（全 5 回）、国立精神・神経医療研究センター高田馬場研修センター、2014.1.14-2014.2.18
③ 堀越勝、小林由季、新明一星、中山孝子：強迫性障害、第 13 回日本認知療法学会、東京、2013.8.25.ワークショップ

国際セミナー
① CBT を用いた OCD 治療、東京、2014.3.8
Jeff Szymanski：完全主義の CBT,
Throstur Bjorgvinsson, Szu-Hui Lee: OCD に対する CBT (曝露反応妨害法)
Lisa W. Coyne：OCD のペアレンティング-家族への介入-
② CBT/ACT ワークショップ、京都、2014.3.9
Jeff Szymanski：完全主義の CBT
Lisa W. Coyne：OCD に対する ACT ペアレンティング

6．研究組織
(1)研究代表者
堀越　勝　(HORIKOSHI, Masaru)
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター　認知行動療法センター
研修指導部　部長
研究者番号：60344850